

●ガール・トーク/ジョー・ベック

ジョー・ベックという名前は、僕のような70年代に「フュージョン」の洗礼を受けて育ったリスナーにとっては特別の輝きを放っている。

エスター・フィリップスをはじめとする、KUDU レーベルでのスタジオ・ミュージシャンとしての数々の名演、ベック本人の演奏もさることながら、デヴィッド・サンボーンの圧倒的なプレイで名高いリーダー作『ベック』、ラリー・コリエルのリーダー作『ライオン・アンド・ラム』『トリビュタリーズ』での見事なアコースティック・ギター、そして67年にサウンドをエレクトリック化したマイルスが最初に起用したギタリストである、という栄光。マイルスのセッションで聴けるベックの演奏は、シンプルなりフを延々と繰り返すだけの、ベックならではの個性は感じられないものではあるのだが、「マイルスにとのっての最初のギタリスト」という称号は、ジョー・ベックを語るときにこれからも必ず冠されることになるのだろう。

1945年生まれのベックは、64年にポール・ウインターのバンドでデビューし、その後チャールズ・ロイドやチコ・ハミルトンなどと共演、マイルスに起用された60年代末ぐらいからは、スタジオ・ミュージシャンとしての活動が多くなっていった。ハードなロック・スタイルから正統的なビバップ、さらにはアコースティック・ギターによるさわやかな演奏までをきっちりとこなすベックのギター・プレイは、いかにもスタジオ・ミュージシャン的な器用さを強く感じさせるものだが、どんなタイプの演奏を要求されたときも、機械的にこなすだけではない「あたたかみ」が漂っているところがいい。

そうした彼の個性がリーダー作の中に反映されるようになったのは、80年代にdmpレーベルから出た4枚のアルバム、『リラクシン』『フレンズ』『バック・トゥ・ベック』『ジャーニー』あたりからだろう。83年の『リラクシン』は、ジェイ・レオンハートとグラディ・テイトとのトリオでスタンダードを演奏した作品。翌84年に録音された『フレンズ』は、マイケル・ブレッカー、ドン・グロルニック、スティーヴ・ガッドといったフュージョン系の大物（ベックにとっては古くからの盟友たち、なわけだが）を従えてオリジナル曲を中心とした演奏を聴かせたもので、88年の『バック・トゥ・ベック』は、デヴィッド・マシューズ、ルー・ソロフ、ジョージ・ヤング（つまりマンハッタン・ジャズ・クインテットの面々だ）や、ベースのマーク・イーガンといったメンバーを集めて、アコースティック・ギターを大きくフィーチャアしたアルバム。そして『ジャーニー』は、デイヴ・サミュエルズのヴァイブとマリンバをフィーチャアしたカルテット編成で、スタンダードとオリジナルをほぼ半分ずつ演奏した作品だった。

90年代以降、現在に至るまでのベックは、確かな技術を持ったベテラン・ギタリストとして、さまざまなフォーマットでの演奏を行い、コンスタントにCDをリリースしてきている。フルティストのアリ・リーソンとのデュオでの活動、マーク・イーガンとダン・ゴッドリーブと組んだトリオ、ギタリストであるジミー・ブルーノとのデュオなどなど、多彩なベックの活動ぶりは、しかし日本のジャズ・ファ

Girl Talk ガル・トーク Joe Beck Trio ジョー・ベック・トリオ	~featuring Joey Defrancesco ジョーイ・デフランチェスコ
1. ジンジ Gingi 《A. C. Jobim》（7：56） 2. エミリー Emily 《J. Mandel, J. Mercer》（7：01） 3. ガール・トーク Girl Talk 《N. Heftl》（7：12） 4. ジョーンズ嬢に会ったかい Have You Met Miss Jones? 《R. Rodgers》（6：47） 5. ローラ Laura 《D. Raskin》（4：03） 6. リトル・ガール・ブルー Little Girl Blue 《R. Rodgers》（5：12） 7. ニカの夢 Nica's Dream 《H. Silver》（5：36） 8. ルビー Ruby 《H. Roemheld》（5：16） 9. ソフィスティケイテッド・レディ Sophisticated Lady 《D. Ellington》（4：45） 10. 星影のステラ Stella By Starlight 《V. Young》（3：58）	
ジョー・ベック Joe Beck 〈guitar〉 ジョーイ・デフランチェスコ Joey Defrancesco 〈organ〉 アイドリス・ムハマッド Idris Muhammad 〈drums〉 録音：2002年6月19日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク ©© 2003 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.	
★ Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan. Recorded at "Avatar Studio" in New York on June 19 , 2002. Engineered by Katherine Miller , Assistant Engineer by Aya Takemura. Technical Coordinator by Derek Kwan. Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Front Cover Photo : © Jeanloup Sieff / G. I. P. Tokyo. Artist Photos : Karen Tweedy - Holmes. Designed by Taz. Joey Defrancesco appears courtesy of Concord Records.	

ンにはあまり知られていない、というのが正直なところだろう。

だから、ジョー・ベックが我が国のジャズ・リスナーにその存在を広くアピールしたアルバムは、99年に録音されてヴィーナスからリリースされた『夜のストレンジャー』がほとんど唯一のもの、と言っていいのかもしれない。ジョージ・ムラーツとビリー・ハートという大ベテランのリズム隊をバックに、フランク・シナトラのレパートリーを演奏したこのアルバムで、ベックは「フュージョン系スタジオ・ギタリスト」という、日本における固定化されたイメージから初めて離脱できた、と言えるはずだ。

そしてこの『ガール・トーク』は、ベックにとってヴィーナスからの2枚目のリーダー・アルバム。今回はジョーイ・デフランセスコをフィーチャアしたオルガン・トリオで、女性の名前や「ガール」「レディ」をタイトルにしたスタンダードばかりを演奏する、という洒落た趣向になっている。オルガン・トリオといっても、いわゆる「コテコテ」のファンキーな演奏ではなく、ウォームでゆったりとした雰囲気が漂うところがいい感じだ。太くあたたかみのある音色で、フィンガリングのちょっとしたニュアンスの端々にブルーギーな苦みをほどよく加えたベックのプレイは、まったく無理のないベテランならではのもの。テクニクの確かさは確実に伝わってくるが、何よりもすばらしいのは、ベックがここでの演奏を心から楽しみ、フレーズひとつひとつの「うた」を大切にしていることなのだと思う。

ここでベックと共に大きくフィーチャアされているジョーイ・デフランセスコは、1971年生まれのオルガニスト。父親もオルガン奏者

（パパ・ジョン・デフランセスコ）で、88年に17歳でマイルスのバンドに加入する、というセンセーショナルなキャリアを持っている。その後もリーダーとして、またサイドメンとしてシーンの中核でコンスタントに活動し、中でもジョン・マクラフリンとの活動（ドラムスにデニス・チェンバースあるいはエルヴィン・ジョーンズが参加したトリオ）や、ボブ・バーク、ランディ・ブレッカー、デニス・チェンバースたちと組んだ「ザ・ジャズタイムス・スーパーバンド」での活躍が話題を呼んだ。

★

ここで演奏されている曲について、簡単に記しておこう。

アーシーなエイト・ビートとノーブルなメロディのギャップがおもしろい「ジンジ」は、アントニオ・カルロス・ジョピンの曲。

「エミリー」は、ジョン・マンデルとジョニー・マーサーによって65年に書かれた曲。ビル・エヴァンスの愛楽曲として名高い。ここではデフランセスコのソロが聴きものだ。

「ガール・トーク」はカウント・ベイシー楽団のアレンジャーとして知られるニール・ヘフティの代表作。オスカー・ピーターソンのレパートリーとして知られる曲だが、ここでのベックのブルーギーな演奏も「ガール・トーク」名演集のリストに加えられてしかるべきものだろう。

「ジョーンズ嬢に会ったかい？」は、ロレンツ・ハート＝リチャード・ロジャース組による著名なスタンダード。速めのミディアム・テンポでベックもデフランセスコも快調に飛ばしている。

「ローラ」は、ジョニー・マーサー＝デヴィッド・ラスキンによるおなじみのスタンダード。ここでは速いテンポの5拍子という、意表をついたアレンジがなされている。

「リトル・ガール・ブルー」も、ハート＝ロジャースのコンビによるスタンダードで、ミュージカル「ジャンボ」のために35年に書かれた曲。リラックスしたミディアム・テンポでの演奏だ。

ホレス・シルヴァーの「ニカの夢」。この曲の定型パターン通りに、ラテン風ビートとフォービートが交互に登場するアレンジで演奏され、アルバム中唯一ドラム・ソロがフィーチャアされている。

「ルビー」は、ミッチェル・バリッシュとハインツ・ロームフェルドによって53年に書かれた、映画「ルビー・ジェントリー」（チャールトン・ヘストン主演）の主題歌。ゆったりとしたミディアム・テンポでのベックのウォームなプレイがすばらしい。

デューク・エリントンの「ソフィスティケイテッド・レディ」は、ベックの重厚なコード奏法が実に美しい演奏。ちなみにベックはギターにおけるコード解釈についての教則本「コード・ワークアウト」を出版しているほど、コード奏法について造詣が深い。

そして最後は、ファスト・テンポで演奏されている「星影のステラ」も、スタンダード中のスタンダードというべき人気曲だ。46年、ネット・ワシントン（詞）とヴィクター・ヤング（曲）の作品。

（2003, May　村井康司）